

第3章 今後に向けて

3 - 1 今後の課題

(1) 市民参加による公園づくり

市民に愛される公園にするため、学術調査（発掘調査）への市民参加など、公園づくりへの市民参加が重要である。

史跡公園での縄文ワークショップなどに、子どもだけでなく、大人にも参加してもらうには仕掛けが必要である。そのため、市民ボランティアとの連携や活用など、体制づくりが必要である。特に、学校との連携が重要である。

(2) 下野谷遺跡を核とした交流、ネットワークづくり

下野谷遺跡が知れ渡ればいろいろな交流が自然に出てくるが、そのときに史跡公園と展示ガイダンス施設の有機的なつながりが重要となる。

練馬区の武蔵関公園から、下野谷遺跡の史跡公園、武蔵野市の中央公園等を結ぶ、ウォーキングや史跡散歩ルートを隣接区市と連携して整備し、利用しやすくする必要がある。

(3) 石神井川緑地の整備など、国、都との連携

史跡公園の整備は5年、10年のスケールで考える必要がある。石神井川緑地の整備が都で予定されているなど、国、都と連携して進めてほしい。

(4) 整備後の対応

史跡公園整備後の施設修復やメンテナンスについても考慮しておく必要がある。

(5) 東西道路の整備

計画地の周辺は閑静な住宅地で、車の通行や人の往来が少ない。

公園の整備は近隣住民に歓迎される一方で、計画地周辺に違法駐車が増えることが懸念されている。このため、整備に際しては東西道路を違法駐車空間にしないよう、東西道路は整備しないことが望ましい。

(6) 隣接する土地の取得

縄文時代中期の集落遺跡という特性を考慮すると、隣接する東西の土地（現在は農地と空地）の取得が遺跡保存の観点から望ましい。将来は隣接する東西の土地を取得し、一体的に整備してほしい。

(7) 早稲田大学が保有している遺物の移管

早稲田大学が行った発掘調査の出土品は大学が保管している。

下野谷遺跡の出土品を市が一括して管理するため、保管及び展示ガイダンス施設を確保し、早稲田大学が保有している遺物を移管してもらうことが望ましい。

3 - 2 各委員のコメント

委員	コメント
都築座長	<p>自然というものは縄文人も現代人も同じように感じると思う。整備後の公園の地に立ったとき、縄文の森あるいはひろばを子どもも大人も同じようにイメージできる公園をつくってほしい。</p> <p>構想整備は上手くまとまっていると思うので、一つでも多く実現して行ってほしい。</p> <p>試掘調査は市民参加でぜひ行いたい。遺跡の保護が絶対条件であり、次に縄文人を体感できるひろば整備である。今後のソフト運営に関しては個人的に協力していきたい。</p>
近辻副座長	<p>両隣の土地の取得を最優先に考えていただきたい。また、博物館の設置は難しいと思うが、報告書にも記載してもらったので、気長に考えていきたい。近隣在住者で遺跡の保存活動にも熱心な方に委員になってもらいたかった。</p>
加藤委員	<p>子どもたちが、自分たちの住んでいるところが有史以前の歴史があると、誇れるような公園にしたい。</p> <p>市への要望として、懇談会や今後の市民ボランティアを募る時など、土日に開催してもらえるとより多くの市民参加が可能である。今後は土日開催を検討してほしい。</p>
都築委員	<p>時の流れと偶然、そして神のいたずらが残した現状を踏まえる中で、残された財産（縄文人の遺産）が子どもや孫の時代に、今蒔いた種（この懇談会での思いの丈や希望など）が芽吹き、人々に生まれ、愛される公園に（まるで愛し合った男女が結ばれ、新しい生命が生まれ、その子どもが愛されながら大人へと育てられていくように）なることを願う。</p> <p>公園整備にあたり、現在まで守ってくれた自然の営みから生まれしもの（樹木等）をただ単にゴミとして捨てるのではなく、ベンチとして使うとか、根の芯を造形物にするとかして、なるべく殺す生命（樹木等）に新たな生命を吹き込んで資源にしてほしい。</p> <p>当時の子どもたちはどのような遊びをしていたのか。</p> <p>長いスパンで考えてほしいのは、ユニバーサルデザインやバリアフリーと言っているが、もっと動的に変化し得る使い易いもの（物性もあるが心の方も）を追求してほしい。</p>
斎藤委員	<p>「石神井川流域の有史以前の人類の歴史を学習する公園」と位置付け、石神井川流域の遺跡公園群のうちの「基幹公園」に育てたい。</p>
山田委員	<p>この公園は、下野谷遺跡の保存と活用を図ることを第1の目的としているが、本懇談会で議論しとりまとめた「整備構想」に基づき整備し、多くの市民の皆さんに親しまれ、防災上の役割など、幅広く活用される公園にしていければと考えている。</p> <p>また、整備後の管理運営には市民参加が重要であり、組織づくりを含め今後の課題であると認識している。</p>
小林委員	<p>今、私たちが踏んでいる土地の50センチ下は、4000年前、縄文の人びとが踏み固めた土地だった。私たちの命につながる道筋を長くたどって、いわば私たちの祖先である人たちが、何千年も前にここでどう暮らしていたのか。ここで同じように土をたたき、木をたたき、石をたたいた。ムラびと全員が力を合わせて十分に生きていたことが学習の中で感じられ、皆さんに親しまれる、愛される公園となることを願う。</p>